

シリーズ われらイキイキ専修人

ヴォーカリスト

宮田 悟志さん

いまも夢の続きで
歌い続けて



↑神田10号館にて

デビューから13年目を迎え、6月2日にソロ活動8周年のライブを開催。6月12日にはデュオユニット BREATHE としてアルバム「Loves' Voices II」をリリースし、ライブツアーも始まった。かつてはプロ野球志望だったという宮田さんが歌手としてデビューするに至った経緯、歌い続けることへの思いとは――。

ダンスナンバーからバラード、R & Bまで、優しく、力強く歌い上げる。デビューから13年――その間には、BREATHEの活動中止、コロナ禍など、いくつもの困難があったが、それも成長の糧に、歌い続けてきた。

「やめていく人が多いこの業界で、信念を持って続けていく。継続は力だと思う」

インタビューで語られた言葉は、まるでアスリートのようでもある。それもそのはず、かつて本気でプロ野球選手を目指していた。そして、その野球に打ち込んだ日々は「自分の芯になっている」という。

野球で培った“目標に向かう感覚”

野球一筋だった。高校は川崎市の親元を離れ、宮

みやた さとし

1984年、神奈川県川崎市生まれ。宮城・東北高校で甲子園出場。2008年、専修大学文学部人文学科卒。大学では体育会野球部所属。2011年、BREATHEでデビュー。2016年、BREATHE活動中止後、ソロ活動。主演・主題歌を務めた映画「NAOKI～Time is Life～」がモナコ映画祭最優秀作品賞を受賞するなど活動は多岐にわたる。2021年よりBREATHE再始動。

城県の東北高校に進学。そして甲子園に出場。専修大学では体育会野球部に所属。同期には松本哲也さん（元ジャイアンツ）や長谷川勇也さん（元ソフトバンク）など、後にプロで活躍する選手が揃い、その中でレギュラーを争い、切磋琢磨した。

しかし、4年次に腰を故障。プロになるために大事な時期を棒に振ってしまう。諦めきれず、卒業を1年間延ばし、独立リーグなどのセレクションを受けた。しかし、結果は出なかった。

「やるだけやったことで、諦めはつきました。ただ、目標に向かいやっていく感覚は体に残り続けた」

アパレル業界で働きながら、ボイストレーニングの教室に通い始めたのも生活に張りがあったからだ。子供の頃から、周りから歌が上手いと言われ、

BREATHE
オフィシャルサイト
<https://breathe.style/>



宮田悟志
オフィシャルサイト
<https://satoshimiyata.com/>



↑大学時代は体育会野球部で活躍



↑2020年9月16日、神田10号館で開催の専修大学創立140周年記念式典にてアカペラで校歌を披露



↑2021年、品川ステラボールでのBREATHE再始動ツアー東京公演

その自覚もあった。最初は、趣味として歌を究められれば、というくらいの気持ちだった。

しかし、シンガーソングライターの広瀬香美さんから直接指導を受ける機会があり、心に火がつく。

『「上手いけど、面白くないわね』ってストレートに言われました。そのとき、広瀬さんが弾き語りを聞かせてくれたのですが、鳥肌が立ちました。これがプロだって。こういう歌を歌いたって、スイッチが入りました」

会社を辞めて、アルバイトをしながら歌手を目指す生活が始まった。23歳の時だ。

運命を切り開いたオーディション番組

2010年、EXILEによるオーディション『Vocal Battle Audition 2』に出場。

「最年長の25歳で、オーディションを受けられる年齢ギリギリ。これでだめなら、区切りをつける覚悟でした。大学の仲間も社会人として経験を積み、軌道に乗り始めていた頃で、自分の中に焦りはあった」

応募者は30,000人を超し、その中からデビューできるのは2名。合宿を行いながら振り落とされていくオーディションの様子は、毎週テレビ放送された。ファイナリスト10人に残り、渋谷の駅前の巨大モニターに自分が映し出されるのを見たときは、自分の周りが大きく変わりつつあるのを感じた。

しかし、落選。失意を胸にステージを去るが、そのとき、審査員の一人、プロデューサーの松尾潔氏にかけられた言葉に勇気をもらう。

「近々、プロの現場で会おう」

同じくファイナリストまで残った多田和也と一緒に、毎日ストリートライブを重ね技術を磨いた。番組を見てファンになってくれた人たちが毎日集まった。

「大阪や北海道など遠くから来てくれる人もいて、その気持ちに応えるためにも毎日歌いました。たま

たま通りがかって、足を止めてくれる人もいて、そうした人の中にはいまでもファンでいてくれる人がいます」

2011年、BREATHEとしてデビューを果たす。

何でもやることで表現の幅が広がる

順調に行くかに思えたが、2016年、多田の引退により、BREATHEの活動に終止符が打たれた。

「そのときは何をしたいかわからなくなった。とりあえず、やれることは何でもチャレンジしようと思って、声をかけられれば俳優として舞台にも立たし、朗読もやりました」

そして、ソロとして歌い続けた。人気テレビ番組「ザ・ノンフィクション」のエンディング曲「サンサーラ」の第6代ヴォーカリストにも抜擢され、その優しく伸びやかな歌声は視聴者の心を捉えた。

「言葉の表現者として、言葉が持つ美しさ、メッセージを届けたい。俳優などの経験で、より言葉が伝わりやすくなったと思っています」

2021年、多田の復帰によりBREATHEは活動を再開。現在はソロとデュオを併行して活動する。

「二人の歌声を重ね合わせることで大きな力になる。ソロとはまた違って、BREATHEではハモリの楽しさを感じながら歌っています」

個人事務所を設立し、会場のブッキングなどにも現在は関わる。裏方も務めることで、一つ一つのライブの重みをより感じるようになったという。

今後の夢を尋ねると、こう答えた。

「デビューしたことで一つの夢はかなったので、それを続けていくことが大事だと思っています。コロナ以降、ライブができない時期もあって、ステージから見える景色は当たり前じゃないようになって思っています。自分の歌で誰かが感動してくれることに幸せを感じながら歌い続けます」